

死んだら終わりですか？ — 臨床仏教ということ —

大谷大学 木 越 康

講演タイトルについて

ただいまご紹介いただきました、大谷大学からまいりました木越康と申します。私の専門は真宗学です。徳永先生は、私ももう少し若い頃から学会等々で親しくさせて頂いておりました。徳永先生から今回のご縁をいただきましたが、先生からの頼み事を断れる方はそうそういないと思います。皆さんもうなずいておられますが、私もお電話で依頼を受け、ご協力できることがあればと、今回のご縁をいただいたということです。何とか協力させていただきますきたいと思います、一応の準備をしてみました。

私自身の専門は、いま申しました真宗学で、日ごろは『教行信証』や、特に大行、お念仏のことについて、若い頃からいくらか論文を書いてきております。しかし今日はそれとは異なり、少し変わった方向からのお話になるかと思えます。

本日は、「死んだら終わりですか？」というテーマを出させていただいております。「臨床仏教ということ」とい

うサブタイトルを付けております。このサブタイトルの臨床仏教というのは、私が近年考えていることで、また今でも大谷大学で臨床仏教というスタンスで学生指導をしております。大谷大学も龍谷大学と同じように真宗学科という、宗祖・親鸞聖人の教えを中心に学ぶ学科がございます。その真宗学科では、二〇一六年度から現代臨床コースというものと、国際コースというものと、思想探究コースという三つのコースを立てて指導をしていますが、私はその中の現代臨床コースを担当しております。その現代臨床コースはいわば私が主導する形で立ち上げたのですが、その背景には、今日お話ししようとしている臨床仏教というものがございます。今日は、最後のほうで、仏教を学ぶということはどのようなことなのか、あるいは真宗学を学ぶとはどのようなことなのかということについて、特に臨床仏教という視点で考えてみたいわけですが、まあ経緯から少しづつお話ししたいと思います。

臨床仏教ということを考えるきっかけになったのは、それまでの私自身の学問的関心も当然あるのですが、実は具体的な問題の投げ掛けがありました。それが今日お話をいたします東日本大震災でのさまざまな私の中での引っかけです。出会いと躓きですね。その震災経験を通して、仏教の学び方について、あるいは真宗の学び方について再考させられる機会をたくさん与えられました。そこから明確化された課題が、臨床仏教という言葉に表されています。

例えば、先ほどこちらの宗学院の話も、少し伺っていたところです。学びの内容を、伺っていました。さて、宗学の問いとはいったい何でしょうか。皆さんはどのようにお考えでしょうか。あるいは真宗学の問い、研究テーマ、あるいは仏教学の研究テーマでも結構です、これはいったいどのようなものであるとお考えでしょうか。もちろん、さまざまにあるかと思えます。私も先ほど申し上げましたように、自分では『教行信証』研究や、あるいはその中の大行研究だと考え、またその方向での仕事もしてきました。キリスト教との対話研究も私の重要な関心としてあ

りますので、これらについての執筆もあります。皆さんもそれぞれにテーマはあるでしょう。関心はあると思います。ただ、それが本当に真宗学の問いの核心なのかということなのです。あるいは仏教の課題なのかということですか。「回心とは何か」とか、「親鸞聖人の本願観」とか、あるいは「唯除とは何か」とか、さまざまな真宗学的な関心が立てられますでしょう。また仏教学的な問いも、当然に立てられます。しかし問題はその立てられる課題の立てられ方が、本当に真宗学の問いと言えるのだろうかという問題です。それが仏教だと言えるのか。それがそのまま、今の私の問いになっているわけです。それが臨床仏教です。

それを決定的に問い直されることになったのが、今日のタイトルの「死んだら終わりですか？」という、問いです。ある母親からの問いですが、これがわたしにとってはとても大きな仏教学的な問い、あるいは真宗学的な問いとして、心に飛び込んでしまったわけです。仏教的な問い、真宗的問いと言ったほうがいいのかも知れませんが、頭にこびりついて離れなくなってしまったのです。

ですから今日のお話の前半は「死んだら終わりですか？」という、私からすると臨床仏教的な問い、あるいは本来の真宗の問いがどこから出てきたのかということをお話します。そして後半はこの問いを受けて、今どのように真宗学や仏教学について再考を迫られ、臨床仏教という言葉で何を考えているかをお話したいと思います。

拙著『ボランティアは親鸞の教えに反するのか』について

以前、東日本大震災に関わって一つの本を出版させていただきました。お読みいただいた方もおられるかもしれませんが、『ボランティアは親鸞の教えに反するのか』という本です。『ボランティアは親鸞の教えに反するのか』。本タイトルを二回言ったのは宣伝しているわけではありません。非常に不思議なタイトルであります。しかしこ

それは、私が付けたタイトルではありません。

私はこのタイトルにはかなり抵抗しました。その抵抗したことについて、案の定のことがいま起こっています。「ボランティアは親鸞の教えに反するのか」と問われると、皆さんはどのように答えられますか。「反するはずがないじゃないか」、「何を言っているのだ」、「こんな本は買わない」と、こうなるわけです。「そんなことは、読まなくても分かっている」となります。いまでもそういう批判で読まない人、買わない人から批判を受けることが多くあります。「読まなくてもわかる。当たり前だ」と。まあそれほど買っていただきたいと思っているわけではありませんので、それはそれで結構と思っています。むしろ読まなくてもお分かりの方は、読まなくても結構だと本気で思ってもいます。心配ありません。

しかし私がこの本を出さなければならぬと考えた当時は、決してそうではありませんでした。いまから七年前、八年前です。やはりボランティア的な活動に対して、いろいろな迷い、戸惑いというものを、特に真宗学を学ぶ若い人たちはたくさん持っていたことは間違いありません。ボランティア的な活動を批判する声も、多く聞かれました。ボランティアのような支援活動について、「これは親鸞の教えに反するのではないか」という批判です。親鸞の思想はただ念仏であり、他力が根幹となりますね。そのほかに例えば往生極楽の道を問い尋ねてきても、聖人は「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」とお答えになりましたね。ですからそれ以外の活動は親鸞の思想ではないのではないかとこの不安が、実際に東日本大震災があった時に、若い人たちの中に多くありました。私も学生からそのような問い掛けや、先輩からは批判を受けたことがあります。後ほど紹介しますような活動を多少していますので、不安の相談や批判をいくらか受けました。そのような中で、このことについて何か書いておかないと考えるきっかけを逃してしまおうと思ったのです。もやもやした思いを持っている多くの真宗者たちのわだかまり

が取れないだろうと思ひ、議論を喚起するために、この本『ボランティアは親鸞の教えに反するのか』を書かせていただきました。

ですから最初に私が自分で付けたタイトルは、違いました。私は、はじめにタイトルを「例えばボランティア的な活動に対して躊躇させるようなもの」としてある親鸞理解の誤り」としました。これも、もう一回言います。「例えばボランティア的な活動に対して躊躇させるようなもの」としてある親鸞理解の誤り」です。これでしたら私は心の中で、言いたいことがストンと落ちます。そんな親鸞聖人の教えの理解は間違いだということです。ボランティアに行き、あるいは他者に対して何らかの支援活動を行おうとしている人に対して、それは自力であるというような批判や、それは「聖道の慈悲」ではないかという批判があります。『歎異抄』で言えば「思うがごとく助け遂ぐる」と、極めてありがたし」なのだ、と。だから、我々はただ念仏なのだ、といった主張があります。しかし、そのような場面でそんな主張によって支援活動を躊躇させるのは、間違いだ。そんな真宗理解があるとすれば、それは間違いなのだということ、これをどうしても書かなくてはならないと考えてしまつて、執筆にとり掛かつたわけです。ですからタイトルはそのまま「例えばボランティア的な活動に対して躊躇させるようなもの」としてある親鸞理解の誤り」です。

ところが、出版社の担当者の方に却下されました。皆さんもお気付きだと思ひますが「長すぎる」と言われたのです。タイトルが長すぎる。本を買うときに検索する場面でもタイトルが表れない。「例えばボランティア的な活動に対して躊躇」で終わつてしまうので、「これは売れませんか」と言われました。そこで担当の方が考えてくださつて、先ほどのような『ボランティアは親鸞の教えに反するのか』というタイトルで出させていただきました。

この本の目的は中に書いてあるのですが、震災の復興支援のような活動に対して、「積極的に行きましよう」

ということを言う気は一つありません。このような考えを私はアクセルと呼んでいます。反対がブレーキです。行くことをためらわせる考え方です。この本の目的は、ただ、ブレーキを外したいだけです。他力思想を大事にする我々だから、支援活動などは自力的でダメだという考え、つまりはブレーキを取り外したいだけでした。ですから、趣旨としては、もう一度言いますけども、躊躇させるようなものとしてあるような親鸞理解は誤りなのだと思います。ということだけを何か表現しておきたいということになりました。

そのような経緯で書きましたが、その延長線上に今日のお話もあります。臨床仏教という真宗学がそのような経緯と思索を深めていく中で、どんどん固まっていき、最終的に定まっていくことになったのです。

簡単に「臨床仏教」について

私が臨床仏教という言葉を使い始めたのは、おそらく二〇一二年ぐらいだと思います。この龍谷大学の大学院のほうにも臨床宗教師というコースがございます。これはもともと東北大学にそのような講座が開設されていて、実際に病院や避難所などで活動する宗教師である臨床宗教師の養成に取り組んでおられるようですが、これと私が考えている臨床仏教とは、まったく違うものです。

もちろん臨床宗教師の活動を批判するつもりもありませんし、たいへんなご苦労の中でそのような取り組みをしておられるので、それはそれで大事な動きだと思っております。しかし、私が言っている臨床仏教というのはまったくそれとは違うものなので、誤解されないようにしておきたいと思えます。臨床宗教師という語があらわす事柄について、あえて横文字にするならば、例えば Engaged Buddhism という取り組みもあります。行動する仏教という意味で用いられ、仏教者がどんどん社会に出て行動するという面が大事にされたものです。臨床宗教師は、そ

の理念に近いのかもしれませんが。

しかし、私が臨床仏教と言うのはそうではなくて、Contemporary Buddhism のほうが適切だと考えています。Contemporary Buddhism というのは、同時性、同時代性、同時代仏教です。その場やその瞬間に、現場で思想が立ち上がってくる、それを学ぶということになります。まさに今ということですから、正確に日本語にすれば「当今仏教」と言えるでしょうか。「当今」は「まさに今」ですが、この瞬間に立ち現れる苦悩や思索、それを仏教と呼ぶというイメージのほうが近いと思います。それをContemporary Buddhism として考えています。

今日は、その内容をお伝えするということで資料を準備してきております。何度も言いますが、そのようなことに思いを致す契機が東日本大震災を受けての活動にありました。現地でさまざまな言葉を投げ掛けられ、その言葉を受けて臨床仏教を考えることになりましたので、皆さんにもできるだけそれを共有していただきたいと思います。写真をたくさん持ってきておりますので、どんな活動の中でどのような問い掛けを受けることになったのかということから、お話をしたいと思います。

東日本大震災復興支援活動から

この写真①は、二〇一一年の四月の被災地、陸前高田のもので、震災は三月でしたけれども、四月、つまりひと月後に私は初めて現地に入りました。被災地に入ったのは、行きたいとか、行きたくないというよりも、私が大谷派のボランティア委員会に入っていたことがきっかけでした。私は当時、大谷大学で学生部長を務めておりました。学生部長というのは、学生生活や課外活動など、学生に関する全般



写真①

を統括する役割をもっています。その時、偶然にも私どもの宗門でボランティア委員会が立ち上げられたのです。阪神淡路の大震災も経験してましたから、宗門としては何か大きな災害が起こった時には、宗門校である大谷大学の学生にも力になってもらわなくてはならないだろうと考えたようです。そこで当時大谷大学の学生部長だった木越もメンバーに入れるということで、私も加わったということです。東日本の震災が起こる二年ほど前の二〇〇九年だったと思います。当初はもちろんこのような大震災が起こるということを想定せずに、活動をしていました。私は素人でしたので、ボランティアについて勉強させていただき、またすでに阪神淡路の震災で活動していたメンバーからさまざまな意見を伺い、いろいろな交流をしておりました。

そのような中で二〇一一年三月一日に、大震災が起こったのです。たまたまメンバーであった私はしたがって、緊急にはありますが、どのような形で現地でボランティア活動ができるのかということ进行调查するために、東北の被災地に視察に行くことになったわけです。それで素人が四月に現地に入ったということになります。

そのとき、正直とても怖かったです。私は、先ほどの経緯からボランティア委員会のメンバーになっていただけで、積極的にそれまでボランティア活動をしたことがある人間ではありませんでした。特別な訓練ももちろん受けていません。なので自分でも驚きましたが、いざ現地に出発する前の晩は、とても怖かったのを覚えています。

仙台に住んでいる仲間と一緒に、岩手県の宮古からずっと沿岸を仙台の下まで車で下りてきて、あの時はお米をトラックに積んで、避難所を回って配りながら、様子を見ることをしたのです。これらはそのときの写真です。

結論的に言うと、後で写真が出てきますが、この初めての訪問が、数ヶ月後には大谷大学の学生と一緒に被災地に入ってさまざまな活動を行うという動きにまでつながっていったということになります。今年、二〇一九年七月に現地にバスで出かけたのが活動二六〜二七回目ほどになります。来年の三月にまた二八回目が二九回目で学生た

ちと一緒にいきます。ずっと復興が、眼に見える形では進んでいくことになります。そうすると、そのうちに被災地の方々との交流も始まるわけです。その交流が始まっていく中で、先ほどの言葉「死んだら終わりですか」や、それをもにしたお母さんから問い掛けを受けることにもなったわけです。それが真宗学の学びを見直すきっかけにもなったわけです。まったくの偶然ですが、それが臨床仏教と言う視点が定まった要因ともなります。順を追って、流れだけをもう少し説明しましょう。

この写真②の土地は、陸前高田です。震災から一応ひと月の時点です。震災直後に、まず何が行われるかと言うと、生存者、あるいは不明者の捜索活動があります。ですから、そのような場面には、我々素人は何もできないということになります。もちろん別の場面でお坊さまたちがたくさん入って、供養などを行う活動はありました。しかし学生たちが現場に入っていくことは、まだ実際はほぼありません。写真の場所には、津波の前にはお寺



写真②

が建っていました。向こう側が海ですが、三〇mを超える大きな波が襲来したということですが。木が四本、五本立っています。これが以前寺の境内に立っていた木だそうです。このお寺さまでは、前任と前坊守、坊守さまが亡くなり、若い住職と二人の子どもが残されました。写真を撮っているのは、小学校の校庭からです。この学校では、四月にはもう登校が始まっています。ですから子どもたちはこういう風景の中で、学校生活を開始したことになるわけですね。ちょっと遅めの始業式でしたけども、たいへんな環境の中で勉強をしていくことになります。

こちらの写真③は、山田町というところです。ここは火が出た場所だと聞きました。これは、先ほどの陸前高田と違い、少し復興が進んでいる様子が見られるので



写真③

ようか。なぜ分かるかというと、道が広くあけられています。この写真④は驚いたことの一つなのですが、先ほどのように道が開けられたところに、早速に電柱を立てている様子です。街ごとに進捗が違うのですが、ライフラインの確保ということがどんどん進んで復興が図られるのですね。建物がすべて壊された街に真新しい電柱が建っていく様子は、素人の私からすると違和感を覚えるものでした。まあ、電気がなければ何の復興支援も始まらないということでしょう。懸命に電力会社の方々が、このような状況の中で次々に電柱を立てていかれます。人命救助から、その後は道を確保し水を通し、電線を引っ張るという作業が進んでいくんですね。



写真④

このように復興がすこし進むと、一応ですけれども、学生を含めた私たち素人も復興支援のお手伝いに行けるようになるわけです。何かお手伝いにと、我々のような素人でも行けるようになりました。最初に大谷大学がバスを出したのは六月三日です。大学からはバスを借りて、あとはすべて本当のボランティアの活動です。教員も職員も、学生も自費です。まあバスがあるので旅費だけはいりませんが、食費も向こうで自炊するので不要です。したがって格安ではありませんが、基本的には自費で金曜日の夜に京都を出発して、月曜日の朝七時半か八時に大学に帰ってくる旅程で行っています。月曜日は帰ってそのまま授業に出席することになります。まあ、授業のある教員や学生だけですがね。



写真⑤

私の本の中に書いていますけども、やはり学生は勉強しなくてはならないのです。それは賛否両論あります。すべてを休んで東北に支援活動に行かれた方もたくさんおられます。しかし私たちのグループとしては、学生も教員も職員も、東北の学校が始まっているような今だからこそ、私たちが自身の日常を大切にしなければならぬと考えました。ですから学生は特に勉強です。それで、金曜日の最後の授業が終わる一九時半の発となるわけです。一九時二〇分まで七講目があるので、それが終わってから、バスで出発になります(写真⑤)。

京都から仙台まで、だいたい一二時間かかります。まあ、ちょうどいい感じですよ。京都の大学前からバスに乗れば、あとは寝ていけば仙台に着くわけです。仙台市内に東本願寺の別院があつて、そこを拠点に活動しています。

まず着いてすぐ晨朝を勤めて、ここを拠点に活動に出かけます。土曜日と日曜日に活動し、日曜日の夜七時半に仙台を発すれば、月曜日の朝七時半に大学に着くということなんです。わずかに二日間ですが、このような支援の活動をずっと続けてきているわけです(写真⑥)。

こちらの写真⑦は最初に行った場所ですが、最初はやはり泥かきや、力仕事がたくさんあります。このような格好で現場に向かうわけです。現地のボランティアセンターに事前登録をし、指示を受けて活動場所に行きます。大学の大きなバスで行きますが、これだけまとまった人数で活動できる団体は珍しいようで、しかも若い



写真⑥



写真⑦



写真⑧



写真⑨

学生ばかりなので、素人集団ですが意外に重宝されました。

最初の活動地は石巻でした。仮設の駐車場にバスを停めて、歩いて沿岸に向かっていくと、どんどん、どんどん風景が変わってきて、学生たちは初めてこのような風景に接していました。

これが海側から住宅街を写したものになります。どこまでが波でさらわれたのか、はっきりと分かりますね。完全に、破壊された状態で街が分断されています（写真⑧）。

こちらの写真⑨も、向こうにクレーンがあつて、そこが沿岸部になります。そこから波が襲ってきたということになります。

最初に行った作業は、一階部分の土砂をかき出すという作業でした。ここは酒屋さんでしたけども、ここに住み続けたいという希望があり、土砂を出すことになるわけです。写真では分かりにくいですが、土砂が三

死んだら終わりですか？



写真⑩



写真⑩



写真⑪

○cm以上、しかもしばらくは水が引いていませんので、すごい悪臭です。魚の腐敗した臭いと、油と、これまでに経験のない異臭でした。加えてそこには無数の虫が飛んでいました。写真では何も見えませんが、ものすごい虫がワーツと飛んでいます。そこに吐き気すら催すような臭いです。みんなマスクを付けて作業をしていました(写真⑩⑪)。

このような場面において性別で人を判断するのはよくないのですが、正直言うと、現地に到着してすぐに私は少し心配をしました。女子学生に耐えられるかなあと思ってしまったのですね。ところが驚きました。学生たちは、もちろん女子も含め、何のためらいもなく現場に足を踏み入れて、写真のようにみんなどんどん作業してくれました。悪臭も虫も関係なしです。洋服は臭いはどうしても取れず、一回の作業で長靴も全部捨てなければなりません。ただどみんな頑張ってくれました。しかしこのような形で半日作業をしても、ようやくこの一部屋部分が終わるだけです。半日で二〇人近くが取り掛かってやっと一部屋なので、何も進んでいない感じがします(写真⑫)。

しかしそれでも、このような作業を延々することになります。午前中にはここを



写真⑬



写真⑭



写真⑮

やって、午後はまた別のところですよ。

こちらの写真⑬は、マンションになります。マンションの一階から出た土砂がこれだけあるわけです。石巻ではたくさんの方が亡くなっておられますが、活動当初はこのような場所で学生たちと清掃作業などを行っていました。

こちらの写真⑭は、第二回目の活動の様子です。二〇一一年の七月だったかと思います。やはり大学からバスで東北に向かい、バスで帰ってくる行程で

の活動です。この時は中屋敷という場所で、少し変わった活動を行いました。同じく石巻ですが、街は一見すると何でもないように見えます。ここは少し海から離れているので、当然波は来ているのですけれども、一応街全体は、きれいに見えています。ところが、歩いていてもよく分かりませんが、実は道の側溝の中に、先ほどのような異臭を放つ土砂がたくさん溜まっているのです。活動した日は晴れているからよかったです。雨が降ると水が側溝を流れず、道に溢れ出てきてしまうんです。ですから何をしなくちゃいけないかというところ、やはり泥のかき出し作業です。蓋を全部めくって、泥を出す作業になります（写真⑮）。

大谷大学はやはり大人数ですので、この町内のこの道一本、次の道一本というよ

うに、長い距離を任せられます。翌日は次の町内での活動です。広い地域からすると、作業は遅々として進みません。重たい蓋を一枚一枚めくって、かき出して、捨てる、そして蓋を戻すという作業を繰り返します。

この作業のとき、初めて被災された方に学生たちは出会いました。最初は、やはりなかなか話せませんでした。目の前におられる被災者の方のご家族に何が起こったのか分からないし、へたに話し掛けることが出来ない気持ちをおみんが持っていました。活動に出掛ける前にも、いろいろな報道がありました。「頑張ろう」と声を掛けてはならないとか、「ガレキをガレキと呼んではならない」など、あれこれ注意事項を学生たちも聞いていました。なんだかいろいろなるルールがあるように感じられ、なかなか現地の人と話すことができない様子でした。親しくなれば「頑張ろうね」と言っても、実は問題はないのですが、とにかく学生にとって現地の方との出会いは、緊張した場面だったようです。とにかく二回目の活動では、何とか数本の道の側溝を清掃して帰りました。それだけです。

移動のバスは時間が長いので、行き道では自己紹介、帰りのバスでは感想を一人ひとりに話してもらいます。一回目の活動も二回目の活動も、感想はほとんど同じです。多くの学生は泣きながら、「何もできなかった」と話してくれました。東北に向かう時にはみんな「何かの役に立ちたい」とか「少しでも力になれるように頑張りたい」と話してくれるのですが、それでもみんな一日中作業をして、たった一部屋、二部屋しか清掃できないんです。町内の道一・二本です。広大な地域の中のマンションの一室、道数本です。私も心の中で「琵琶湖の水を、一人バケツで汲み出そうとするようだ」と感じていました。ですから張り切っていた学生たちも、疲労がたまった身体で多くが「何もできなかった」と泣くのです。バス中がみんな、静かに泣いていました。

『歎異抄』にあります、「思うがごとく助け遂ぐること、極めてありがたし」です。『歎異抄』の言葉を知らない学生たちが多くいますが、バスの中で泣きながら話してくれたのは、実は『歎異抄』での悲歎だったと思います。



写真⑩



写真⑰



写真⑱

私の言う「臨床仏教」が、この帰りのバスの中にはあったのです。

次の写真⑩は、一〇月です。一〇月頃になると、ようやく被災された方々が仮設住宅に入って生活するようになりました。

最初は皆さんはこのような場所ではなく、避難所に入られます。緊急的に避難し、生活される場所ですね。映像でよく見かけたと思いますが、体育館やお寺の本堂などです。それらの方々が少しずつ、写真のような仮設住宅、プレハブ住宅に移っていくこととなります。そうすると今度は、そちらにも私たちのようなボランティア団体の活動範囲が広がることになるわけです。いよいよ、人と人との交流が始まります。

多くの場合、炊き出しを行います。最近の学生は、キャベツなんて切らないのですね。はじめから千切りになったもの売っていますから、切るのも実は初めての学生も多くいました。あるいは、タマネギの皮などむいたこともない学生たちです。むいたら涙が出ることを、初めて体験するというような感じの活動です（写真⑰⑱）。

仮設住宅は、狭い空間に家族ごとに入居されるわけです。私たちの活動も最初は慣れておりませんで



写真⑱



写真⑳

したので、写真⑱のように地面に大鍋を置いてカレーなどを作っています。いまはこのような衛生上の問題があるような作り方はしませんが、最初はこのように地面にコンロをじかに置いて、カレーを作ったりしました。

仮設住宅を設置する場合、多くは中央辺りに集会所になるような施設があります。ここは小さな漁港の村でしたが、中にはお母さんたちがいて、お父さんたちは、ここは小さいですけども、私たちが訪ねた一〇月になると、網の繕いを始めたり、漁具の整理をしたりしておられました。夕方になるとお父さんたちも集会所に集まってきて、私たちのような炊き出しグループが来ると、集まって提供されたものを食べてくださるわけです。

ただ、写真⑳を見て分かるように学生たちは輪の中に入っていません。やはりまだ少し怖いようでした。接触するということは非常に恐ろしいという感覚があつて、体育館の隅っこで、学生たちは集まって作ったものを食べていました。このような感じで、少しずつ学生たちの活動が行われていったわけです。

翌日も同じ仮設住宅、集会所での活動です。この時期の東北は、もう冬支度です。被災されたのが三月で、皆さん冬物を持って出ているわけではありませんでした。もうすぐ寒い冬を迎えるので、私たちは全国から送られてきた支援物資の中から冬物などを持って、現地へ運んでいきました。体育館にそれらを並べます。

聴衆の皆さんの中にも、何か支援物資を東北に送られた方がおられるのではないのでしょうか。一点だけ、注意を申し上げておきます。私も知りませんが、適当にダンボール箱に物資を突っ込んで、送らないでくださいということですよ。よくやるのが、セーターとセーターの間に割れないだろうからといってお皿を突っ込むんです。あるいはマグカップの中に靴下を突っ込む。気持ちは分かりますが、実はあれは現地では、全部一旦出して整理しなくてはならないんですね。全国から送られてきた物資の箱は、一応中身が何か書いたものが多いですが、基本的に思い思いに入っています。ですから実際に仮設などの現場に物資を持ち込もうとするならば、そのような段ボール箱をポンと持つていくわけにはいかないのです。何が入っているのかわからない。ですからすべてを一度出して、区分けして再整理し、詰め直します。男性の上着、女性の上着、男性のズボン、女性のズボン、スカート、冬物、夏物、コップ、皿といったように、すべて整理します。

実際皆さんのご家庭でも、物は整理して保存されますよね。食器棚を開けた時に、コップの中に靴下が入っているという家はないでしょうか。洋服ダンスのセーターとセーターの間から皿が出てくることはないでしょう。笑い話のようですが、こんなことも実際に活動してみると、わかってきます。やはり整理して、ラベルに書いて、してお送りするというのが一番良いですね。

まあそのようなことは多くができませんから、全国から何千と送られてくる段ボールを整理するだけのためにも、実はボランティア活動が必要になるわけです。二日間ずっと倉庫にこもって、一度すべての荷物を出して、整理して新しい箱に詰め直す。まったく被災地にも行かない、被災者にも会わない、そんな地味な陰の作業も、ボランティアでは大事な仕事になります。私も初めてそのようなことを知ることができました。こちらの写真⑳が、日曜日の午後の作業です。冬物などを出して、皆さんがお持ちできるように並べておきます。私たちはセットだけして、

死んだら終わりですか？



写真⑳



写真㉑



写真㉒



写真㉓

急いで京都に戻るといふことになりました。
次の写真⑳は冬の様子です。二年が経った冬です。少し我々も活動に余裕ができたので、季節に合ったものや、京都から行っているのが、京都のものを持っていくという工夫をすることができるようになったのがこの時期です。九条ネギや豆腐など、やはり京都のものを持っていくと喜ばれます。仙台市内の東本願寺の別院で仕込みをして、現地に持って入るわけです。

この冬は、初めて餅つきを行いました。学生たちも当然初めてです。皆さん見てお分かりのように、危ないことに、軍手をしたまま、杵をふるっています。女子学生の方も危ないことに、肘を入れてお餅を返しています(写真㉒㉓)。

このような姿を見ると、現地のお母さんたちは大笑いです。「違う」と言い、「こうするんだ」と教えてくださるようになりました。一人のおじいちゃんには腰にコルセットをしたまま、「こうやってやるん



写真⑳



写真㉑



写真㉒

だ」と教えていただきました(写真㉑㉒㉓)。

いい笑顔がいっぱいになります。このように学生と現地の方々との交流が和やかになったのは、二年ぐらいたつてからになりますでしょうか。誰も怖がらず、みんないろいろなことをお話しさせていただくようになりました。

お餅を用意すると、向こうのお母さんたちがいろいろな準備をしてくださいます。「こうやって団子にするんだよ」と、ほとんど向こうの方々作業して、逆に学生たちにふるまってくださいます。シャッタースピードが間に合わないぐらい、どんどん、どんどんおもちの団子を作られる。どうしてもたくさん作るのかというと、この仮設住宅は仙台市内にあつて、二七〇程の世帯が入っています。中には家から出てこれない方も多くおられます。ですから出来た餅は団子にして、各家にお配りするのです。お母さんたちはこのように一生懸命たくさんたくさん作ってくださいます。これは納豆餅や、仙台名物のずんだ餅ですね(写真㉓㉔)。



写真⑳



写真㉑



写真㉒

閑上中学校でのこと

さてこのように、活動がどんどん進み、いろいろな方々との交流が始まるのですが、そこでいよいよ本題の言葉との出会いです。「死んだら終わりですか？」という言葉と、出会うこととなります。

こちらの写真⑳は、「閑上地区」にある閑上中学校です。仙台市からもう少し西に下りたところですが、名取市にある閑上という場所なのですが、少し変わった漢字です。この閑上というのは、門がまえに水と書いています。このような文字はないそうです。この地区独特の漢字なのだそうです。

これはどうしてかと言うと、この地区を丘の上のお寺から見たときに、寺の門を通して水が見えたのだそうです。水は、海です。要するに、海がそれほどに近い地区であるということ象徴するのが閑上の「閑」という漢字です。

死んだら終わりですか？

また「ゆりあげ」というのは、意味も面白いですね。これは「ゆり上げる」という意味のようです。かつて観音様が、この地域の海辺に打ち上げられたのだそうです。それは大津波によって打ち上げられたということです。そこから「ゆりあげ」と地名が使われているのだそうです。ですからとても海が近い、海に縁のある地域だったのですね。しかも大きな津波も、過去に襲ったとされる地域です。

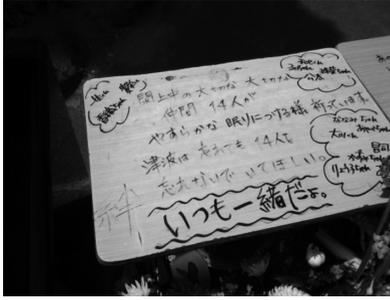
ところがそんな閑上に、大きな被害もたらされることになったのです。たくさんの方々が、この度の東日本大震災の犠牲になってしまいました。七〇〇〇を超える住民が住んでおられる地域です。ほとんどが漁業や農業だそうですね。海と畑がある地域です。このような場所ではありますが、ここに津波が押し寄せ、地域だけで八〇〇人の方が亡くなったということです。非常に大きな被害が出ました。

写真の閑上中学校には、多くの方々が避難してこられたそうです。今はこの校舎は取り壊されて、合併して別のところに移っています。先ほどからお話していますように、東北に行くとは基本的には学生とボランティア活動に赴くのですが、それでは震災被害というものに学生が接する機会がないということがあります。今はきれいに整備されていますので、被害が心に刻まれないで、活動だけして帰ってくるようになります。ですから今では東北に出掛けるときには、必ず大きな被害を出した閑上地区に研修に行くようにしています。二時間ほどの研修でしょうか。この閑上地域にはメモリアルの家があつて、そこに語り部さんたちがいてくださいます。閑上で何が起こったのかということ、学生たちに話して聞かせてくださいます。ですからそこに行つて向こうのお父さん、お母さんから話を聞いて、そして周囲を見て、そしてまた活動に行くということを繰り返しているわけです。

その閑上中学校ですが、学校前にこういうものが置いてありました(写真⑳)。

これは何かというと、慰霊碑ですね。黒い慰霊碑があつて、手前に二つ机があります。ひよっとすると、皆さん

死んだら終わりですか？



写真③



写真①



写真②

仲間一四人がやすらかな眠りにつけるよう祈っています。津波は忘れても一四人を忘れないでいてほしい」と。そして、「いつも一緒だよ」と書かれて、その周りに名前が書いてあります(写真③)。

私もそうなのですが、最初に行った時にこの机を見ると、みんなこの前に立ちすくんでしまいます。じつと言葉を読み、涙をこらえる人が多くいます。もちろん私もそうでしたが、ある時私はふと、「これは誰が書いたのだろうか」と思うようになったのです。クラスの仲間なのか先生なのか、いろいろなことを思いながら、いつも学生たちとこの机の前に立っていました。

そして、隣にあるのが次の机です。皆さんの資料にも写真をプリントしています。

の中でも閑上に行かれた方はこれを見たことがあるかもしれませんね。この慰霊碑には一四人の子どもの名前が記されています。この中学校で被害にあつて亡くなられた方ですね。一四人の生徒さんが亡くなっています(写真②)。

中学校一年生が四人、中学校二年生が七人、三年生が三人ですね。一四人の子どもたちが亡くなつて

おります。その横に二つの机があります。そこには、このように書いています。「閑上中の大切な大切な

死んだら終わりですか？



写真③④

あの日大勢の人たちが津波から逃れるため、
この閑中を目指して走りました。
街の復興はとても大切な事です。
でも沢山の人命が今もここにある事を忘れないでほしい。
死んだら終わりですか？
生き残った私達に出来る事を考えます。

読めますでしょうか。今日のタイトルは、この言葉です。

「死んだら終わりですか？」と書いてあります(写真③④)。

これを読んだとき、「うーん」と思ったのです。いまでも
思いは変わりません。学生たちと何度も行っておりませんが、
この言葉の前に立ちながらいつも自分に対して「死んだら終
りですか？」という言葉をどう考えたらいいのだろうかと思
っていました。何が答えられるのだろうか。それで、親し
くなったメモリアルの方へ尋ねてみました。この
言葉を書いた方が誰か。そうすると、これはあるお母さんの
言葉だということがわかりました。一四人のうちの一人、息
子さんを亡くされたお母さんが書いた言葉だと教えてくださ
いました。隣の机、一四人の名前を書いたのもそのお母さん
が、「大川君」、「公太」とあります。この「公太」、ここだけ呼び捨てにしています。実はこの公太君のお母さんが、
これらの言葉を机に書いたのだそうです。このお母さんが「死んだら終わりですか？」という言葉を書き、みんなに投げ
掛けておられるわけです。それを聞いた時に、私はいろんなことを考えました。何をこのお母さんは言っているの
か、なぜこのような問いを持っておられるのだろうか。この問いを私たちはどのように受け止めればよいのだろ
うかと、頭を離れなくなってしまうのです。

この辺りの内容までは、冒頭に紹介した本にも出ていると思います。実は本を書いた後、このお母さんと何度かお会いすることになりました。いろいろとお話を伺うこともできました。ずっと自分は引っ掛かっていたので、やっとお話を伺うことができたのです。

もう一度言葉を見ましょう。「あの日大勢の人たちが津波から逃れるため、この閑中を目指して走りました。街の復興はとても大切な事です。でも沢山の人の命が今もここにある事を忘れないでほしい。死んだら終わりですか？ 生き残った私達に出来る事を考えます」です。まずは最初の部分です。「あの日大勢の人達が津波から逃れるため、この閑中を目指して走りました」というところの意味です。なぜみんな閑中を目指して走ったのか。お母さん、丹野祐子さんから話を聞くことができました。

三月一日は閑上地区の学校や幼稚園の卒業式だったそうです。卒業式ですので、午前中に学校行事は終わり、みんな下校していたのだそうです。ところがその時、地域で卒業や卒園を祝うパーティーを公民館で行っていたそうです。公民館は、中学校から二〇〇mほどの距離にあります。公民館の二階で中学校の生徒さんとか幼稚園の子どもたちがお祝いをしていた。そこに地震が起こったのです。最初に揺れてから津波が来るまでに、皆さんご承知のとおり一時間ぐらいはありました。ですから、逃げられるのです。しかしなぜそうならなかったのか。その公民館の二階は、そもそも避難場所に指定されていたのだそうです。避難所として指定されているのです。ですから、そのままそこに居ればよいわけですね。ところが、これはいろんなところでいろんな問題があつてあまり詳細ははっきりしないのですが、どこからか情報もたらされて、ここでは駄目だという話になったのだそうです。もつと大きな津波が来るから、この公民館ではもたない、連絡があつたということ。そこで、もつと高い中学校まで逃げようとなったそうです。それで「あの日大勢の人たちが津波から逃れるため、この閑中を目指して走りまし

た」とあるのです。たくさんの人たちが公民館を離れて中学校に向かって走ったのです。

そこで、非常に恐ろしいことに、そこに津波が襲って来たのです。子どもたちが流されてしまったのです。お年寄りや足の悪い方は、公民館の二階に残ったのだそうです。結局公民館の二階は、助かったということです。ですから、そのままいれば助かった可能性もあったのですが、逃げた人たちが被害に遭ってしまいました。このように、この閑上中学校を目指して走ったけれども、この中学校では一四人の子どもたちが命を亡くし、自分の息子もそのときに亡くなってしまったと、彼女は話してくださいました。

その後、丹野さんはしょっちゅう閑上中学校に来たのだそうです。現場に足を運んだそうです。当時は、まだ慰霊碑も何もありません。机も何もないところでした。何をしに来たのか分からないけども、彼女は自分の子どもが亡くなったこの場所にずっと来ていたのです。お母さんはこのようにお話をしてくださいました。お母さんへのインタビューです。公開するということについてはもちろん許可を得ています。こうおっしゃいました。「あの日、閑上にちよくちよく来るもの好きは、たぶんいなかったんです。来るのは私ぐらいのものだった。閑上の町が何もなくなつて、来る理由がないから。だから、私も『何しに行っているの』と、かつての仲間たちにも言われたことがあります。行く意味のない場所だったんです。私も『何しに来ているの』と言われるぐらいに。でも私にすれば、もしかしたら息子に会えるかもしれない大事な場所だったんです。もしかしたら息子の思い出を何か拾えるかもしれない、大切な場所だった。だから毎日のように、意味がなくても通った。自分の中では、ここに来るのが当たり前だった。何も不思議なことでもなかった。そのうち、ただ学校を見て終わるのではなくて、ここには一四人の生命があつたんだよということを何か伝えたいと思って、最初にメッセージを書いたんです」とおっしゃっています。「ここに一四人の生命があつたんだよ」と、ここのお話では過去形で言っておられるわけです。それで、書いたメ

ツセージが、先ほどの机のメッセージだったそうです。一四人の名前がちりばめられた「みんな一緒だよ」のメッセージです。これを先に書いたのだそうです。その後、「死んだら終わりですか」のメッセージの机です。

これらの机は、学校から勝手に引つ張り出したものだそうです。献花台のつもりだったとおっしゃっています。つまり、お花をそこに置くためのものですね。それで、次のようにもおっしゃっています。「自分が献花台を作ったら、次の日、私が置いたのとは違うペットボトルが置いてあったんです。『あー、もしかしたら、ここに来てるのは私だけじゃなく、ほかにもいるんじゃないかなあ』って、そう思うと、何となく心強くなって。それで、やっぱりあの場所に子どもたちのゴール地点を作りたい、子どもたちが生きていた証しを作りたい、と強く思うようになったんです」とおっしゃっています。そこから、黒い石の慰霊碑が作られていきます。あれは記念碑や慰霊碑と言われることもありますけれど、そのようなものではなくて、丹野さんは「ゴール」だと言っています。走って届かなかった場所に、子どもたちのゴールを作ると言って、一四人の名前を刻んで、これを一年後に作られたのだそうです。遺族会の方々が慰霊碑を作り、中学校の前に置いたのです。それが多くの人々の心を捕まえるようになったのです。

現在はせっかくのゴールが、実は流浪しております。この閑上地区全体がかさ上げをして六mの土を盛って、当時とは全然違う風景になっています。行政からすると復興なのでしようが、丹野さんたちご遺族からすると、あちこちと子どもたちのゴールが動かされていってしまうわけですね。とても困っておられました。やはりご遺族の方々は、そこにも違和感を持っておられるそうですね。特に丹野さんの言葉は、かさ上げをして全部を埋めてしまえばそれで復興なのかということですね。大切な方を失ったご遺族は「私たちに復興は永遠に来ない」ともおっしゃっています。もちろんそうですね。子どもの命が返るわけではない、失った生命は戻らないので、復興というの

は永遠に来ない。

丹野さんは、次のようにもおっしゃいました。「津波が来るまで一時間以上この町はありました。逃げるという行動さえとっていれば、全員たすかることが可能だった街。津波が来ないだろうと勝手に解釈してしまった。それでこれだけの犠牲を出してしまった。地震の後には津波が来ることをちゃんと子どもたちに教えるべきだった、自分も学ぶべきだった。勉強しなさいとか、宿題しなさいとか口うるさいことは言っていたけど、親より先に死んではいけないという一番大事なことを私自身、いつさい伝えることができなかった。勉強なんかできなくていいから、生きてさえいてくれればよかったのに。宿題できる子どものほうが立派だって勘違いしていたバカな親だった。そうならないように、いまは『生きていることが最大の親孝行だ』ということ皆さんに伝えたい。命さえあれば、なんでもできたんです」と。先ほどの語り部というのは、丹野さんも含め、このようなメッセージを子どもたちや、次世代の方々に伝え続ける役割を果たしてくださっています。

一四本のチューリップ

このような事情があつたのですが、次にお見せするのが、チューリップの写真^㊸です。これは先ほどから何度か出てくるメモリアル施設で、ここには大きなプレハブが二棟建っていますが、その地面にこれが置いてあります。たぶん、いま行ってもどこかに置いてあると思います。このことについては、うわさで聞いていたのです。このチューリップの写真のことと、そのいわれまで聞いていなかったのです、その話を丹野さんに伺いました。「お母さん、このチューリップの写真は何ですか？」と言った



写真^㊸

ら、丹野さんは、「変な話をするんじゃないですよ。不思議な話をするんじゃないですよ」ということをさんざん私に言ってから、それからようやくこのチューリップの写真の意味をお話ししてくださいました。

先ほどからお母さんの言葉を紹介していますが、あれは私が録音したものを文字化したものです。ほぼそのままお母さんの言葉です。ものすごく言葉の整理ができる方で、そのまま文章になるので驚くほどです。泣きながらお話しなさるということではないのです。もちろんおつらそうな表情もされますが、堂々と、きちんと整理してお話くださいます。そういうお母さんです。

チューリップについては、こちらから尋ねると、ようやく話をしてくださいました。震災の後、支援する方にチューリップの球根をもらったのだそうです。それを先程の慰霊碑の周りに適当に植えたのです。塩水に浸かっている土地なので、きれいに生えるかどうか分からないのですが、とにかく適当に植えて、適当に水をやっていただけそうです。すると、春になってこのように咲いたのだそうです。ですから、お母さんはこのようにおっしゃっていました。「春になって、よきによきと葉っぱが出てきたんです。それで花が咲いたので、写真を撮って、球根をくれた人に写メを送ったんです。『チューリップ咲いたよ、ありがとう』と。するとその人から、『ちよつと、花を見てみな』と言われたんです。そこでまじまじと見ました。そしたら、チューリップが一四本咲いていたんです。スーパ一の袋ひとつ分、ゴソツと貰ったのが、なぜか咲いたのが一四本。一四という数字は、亡くなった子どもたちと同じ数……。それを見た時に、『これは偶然ではないなあ』と思っただけです。『最初からいっばいあつたけど、咲くのは一四本って決まっていたんだなあ』と思ひ、なんとなく嬉しくなつたんです』とおっしゃるわけです。

「最初から咲くのは一四本と決まっていた」と。これは失った中学校の子どもたちの数ですね。それで、このことがあつてから、お母さんは、子どもは生きているということを確信されるのですね。そして、うれしくなつたと

おっしゃっています。

毎年三月一日に、ハト風船にメッセージを書いて空に向けて飛ばすイベントを行っています。子どもたちに対して、メッセージを送るのですね。これについては、次のようにおっしゃいます。「毎年三月一日には、ハトにメッセージを書いて空に向かって飛ばす『ハト風船のメッセージ』をします。今年も、前の日まで雪が降って天気が悪かったのだけれども、またある日は、当日にもすごい風が吹いていたこともあったけれども、ハトを飛ばすその瞬間だけは、いつもびたつと風がやむのです。そして海に向かって、ちょうどいい風が吹きます。なぜかその日だけ、ちゃんと守られるのです。これはきっと、こういう風に、ちゃんと守られるように、子ども達が操作してくれているのだと。そう思うと、なんとなく『死んでも終わりじゃないよ』ということを、そのことをちゃんと伝えたいと思うようになったのです」とおっしゃるわけです。「死んだら終わりですか？」というあのお母さんの短い一言なのですが、このような背景の中で問いかけておられるわけです。子どもたちが操作している。死んでも終わりじゃないのだということです。

このお母さんが出会っておられる世界、事実とは、一体何なのでしょう。皆さんはどのように考え、もしくはお答えになりますか。どうしましょうか。真宗学的に言う、仏教学的に言う、いろいろ言いたいし、言えることもあるのかもしれませんが。心理学的にも、何か言えるでしょうか。しかしおそらく、すべてが不要なのかもしれません。まずはこのお母さんがどのような世界で何に出会っておられ、どういう思いの中で「死んだら終わりですか？」という問いを持つておられるのか、です。「死んでも終わりじゃないよ」というお母さんの実感は、私たちの様々な思いを越えて、間違いのない事実としてあるのです。

生命科学的にいうと、これは間違いだと指摘することができるかもしれませんが。心理学的には、専門家として別

の説明を用意できるでしょう。カウンセラーの方も、何かおっしゃることがあるでしょうか。しかし私たちは、どう答えるべきなのでしょう。か。「私たち」とは、真宗や仏教を大切に学ぶ私たちのことです。もちろん何も言わないということであっても、この問いをどのように受け止めることが、真宗や仏教の風土の中での受け止めになるのでしょうか。それが私の言う「臨床仏教」ということです。仏教的問いそのものが、このお母さんの言葉、世界観の中にこそあるという考え方です。

さて、ここまでで考えたい内容を大まかに共有することが出来たと思います。「死んだら終わりですか？」という問いに対して、今は何かここで私の答えを示す用意はありません。例えば現代臨床コースの大学での授業では、たとえばこの「死んだら終わりですか？」というお母さんの言葉を提示して、学生たちに議論してもらっています。ものすごく悩んでくれていますが、これが臨床仏教の大事な問いの一つだと考えています。

西田幾多郎と臨床的思索

臨床仏教のモデルとして、西田幾多郎の言葉があります。私なりのモデルですね。お手元の資料にお配りをしてあります。もちろん西田は臨床仏教ということを書いてあるわけではありませんが、仏教ということ、あるいはそのような思想を学ぶスタンスについてお話をしてくださいように思います。「我が子の死」という文章です。ご友人が子どもを亡くされた時に、自分が子どもを亡くした時の経験を書き送ったものです。西田幾多郎も子どもを亡くしているので、そのときの感情について、このように手紙を書いています。

「ただ亡児の倂を思い出いずるにつれて、無限に懐かしく、可愛そうで、どうにかして生きていてくれればよかったと思うのみである。若きも老いたるも死ぬるは人生の常である。死んだのは我子ばかりでないと思えば、理に

おいては少しも悲しむべき所はない。しかし人生の常事であっても、悲しいことは悲しい。飢渴は人間の自然であっても、飢渴は飢渴である。人は、死んだ者はいかにいつても還らぬから、諦めよ、忘れよという。しかしこれが親に取っては堪え難き苦痛である。時は凡ての傷を癒すというのは自然の恵めぐみであって、一方より見れば大切なことも知らぬが、一方より見れば人間の不人情である。(中略) 折にふれ物に感じて思い出すのが、せめてもの慰藉である。死者に対しての心づくしである。この悲は苦痛といえば誠に苦痛であろう。しかし親はこの苦痛の去ることを欲せぬのである」というふうにおっしゃっています。子どものことを思い出して非常につらい、苦しい思いをしているのですけれども、この苦痛が去るということを実は親は欲してはいないのだと、実際にお子さんを亡くした西田は書いているわけです。

それで、臨床仏教という視点から考えたいのは、「理においては少しも悲しむべき所はない」という箇所です。仏教の思想、あるいは真宗の思想、親鸞聖人の言葉も、理という点から人間の感情や出来事を捉えれば、いろいろな場面で明快な解答を与えることができるかもしれませんね。仏教の理において人の死を捉えるならば、無常の道理ですね。だから諦めるのが仏教的解釈になるのかもしれない。それが真理に目覚める者の態度だと。死を受け止めようということも言われます。しかしそのような理を語ることが、そのまま仏教なのかということ。それが真宗の営みなのかということ。それは西田の言い方ではただの不人情だということですね。人の情、心になんら分け入ることができない仏教です。そのようなものとして仏教や真宗を学ぶと、現場に出かけて行ってそのまま理を語る、不人情の研究者が蔓延するだけかもしれませんね。

通夜や葬儀の場で、白骨のお文など、お西でも読まれますかね。お通夜などで読まれますが、ここに明確に出てきますね。「朝には紅顔ありて夕べには白骨となれる身なり。すでに無常の風きたりぬれば、すなわちふたつのま

なこたちまちにとじ、ひとつのいきながくたえぬれば、紅顔むなしく変じて、桃李のよそおいをうしないぬるときは、六親眷属あつまりてなげきかなしめども、更にその甲斐あるべからず」とあります。これはとても大事な言葉であり、当然、蓮如上人がある場面の中で絞り出し、立ち上がってきた言葉であるはずなのです。しかし言葉だけ切り取ってルーチンのように、手法として実施されれば、本当にそれが仏教なのかどうかという問題が残ります。確かにこれは仏教的な道理からすればそうなのでしょうけれども、その場にいる方々の情はどこにあるのかということ。情にどう答えるのかという問題です。

あるいは、これは大谷大学の初代学長の清沢満之の言葉ですが、例えば仏教的な真理というものを背景にして、このようなこともおっしゃいます。「如意なるものと不如意なるものあり。如意なるものは、意見、動作及び欣厭なり。不如意なるものは、身体、財産、名誉及び官爵なり」です。如意というのは、意のごとくになるものです。不如意というのは、意のままにならないものです。身体のことや財産や名誉や称号は、意のままにならない。この身体については、病氣や死がありますね。ですから「不如意なるものに対しては、吾人は微弱なり。奴隸なり。他の掌中にあるなり」です。抗うことはできません。若干の抵抗はできるでしょうが、命に関しては我々ができることは少なく、最後は天の命に任せるしかないということです。無常の道理、無常の風が来れば命は終わるのだという事です。あるいは「疾病死亡貧困は不如意なるものなり。之を避けんを欲するときは、苦悶を免るる能わじ。土器は破損することあるものなり。妻子は別離することあるものなり」とも言います。これらも仏教的な真理に導かれて示された言葉です。ただ、これらは、清沢自身が自分の子どもや奥さまを亡くしていられる中で、やはり満之の苦しみの中から生まれてきた情の言葉なのかもしれません。

このような言葉を後の我々が文字だけを切り取って、仏教的真理として学び取ることが、仏教の学びであつたり

真宗の学びであるのかということですね。さらには学んだ内容を工夫して語ることができれば、それで仏教的実践になるのかということですね。お分かりのように、人間はそのような理の領域を生きていないし、説明されても苦しみを乗り越えて生きてはいないわけですね。そのような感覚を、西田は「不人情」と言うのでしょうか。それが理としての仏教ですね。

もしかしたら長い時間の真宗学的営みの中で、私たちは本来そうではない仏教や真宗を、単なる「理」と化してきたのかもしれませんが。人間の悲しみや苦しみや罪の意識から切り離された言葉として真理化し、それを理として語る中には、本当の宗教的生命は込められてはいないのでしょう。とにかく、私自身がそうでありましたから、理としての仏教から臨床的な仏教に帰りたいということ、そのようなことを考えているわけです。学び方とか、あるいはお聖教の言葉の受け止め方を変えなくてはいけないと考えているわけです。

人間は、理はある程度勉強すればわかります。真宗学でも、大学院まで進んで学べば、相当に理解は深まります。しかし理において深まったとしても、悲しいことは悲しいし、苦しいことは苦しいのだと。「親はこの苦痛の去ることを欲せぬ」という世界もあるのですね。そこにおいてどのように仏教たり得るのか、真宗たり得るのかということでしょうか。

先ほどから紹介している丹野さんは、子どもは生きていけると言うのです。それは理において考え、理において語っているわけではもちろんありません。とても理性的な、しっかりした方ですが、お分かりの上で、理性とはまったく別のところで事態を受け止め、信じて語られるわけです。そのような言葉や世界を私たちがどう受け止めて、問いをいただき、何をそれに対して語るのか。ともかく私たちは世間的現象を「理」とは異なるところで聞き、受用していくべきなのだと思うことです。それが臨床仏教の基本になります。

例えば野々村直太朗の「浄土教批判」

教学の近代化は西東本願寺を問わず、ある程度起こったことであります。我々の東本願寺の教学近代化の代表は、おそらく清沢満之という人になるかと思いますが、西本願寺さまのほうでも、これは私の尊敬するお一人ですけれども野々村直太朗先生という方がおられますね。何度か私も論文を書いて、龍谷大学でも発表させていただきました。先生は例えばこういうことを言っているわけです。「往生思想は過去の思想であつて、もはや現代および将来に容れらるべき思想ではない」と。また「極端なる往生思想も、さながら嚴冬の結氷が漸く春陽に逢えるがごとくに消却して、これと入れ替わる新思想は、従前とは全く反対に、現世を目的とし人生を本意とする近世思想、即ちここに所謂ヒューマニズムであつた」とも言われます。これらの主張のタイトルは「浄土教批判」とあります。浄土教というものに対して、近代的批判的な眼を向けながら論争を起こした人ですね。それが野々村直太朗です。先生の言う往生浄土というのは、死後に生まれていく世界としての浄土を、まったくの実在として求めるような浄土教信仰です。このような思想はすでに現代とか将来に受け容れられないのだと、主張します。それが浄土教批判ですね。これから未来はそのようなことではなく、今のこの人生の充実、現世を目的として人生を切り開く思索が台頭するのだとして、浄土教はもはや受け容れられないだろうと主張し、変革を訴えられました。生まれてから死ぬまでの間にどれだけ充実することができるのか、それが人間の関心の中心となるということです。死後の浄土往生信仰から現世中心の人生観ですね、これが大切な現代的思想だとして、浄土教界に衝撃を与えたのです。これについては「そうだ、そうだ」という賛同者もたくさん出てきました。「いや、それは違う」という批判ももちろん出てきました。

野々村はさらにこのように言います。「一体、往生とはいかなる事柄を指しているのであるか。いずれにしてもこの土に死して彼土に生まるる事であるだけは間違いない。言い換えうるならば、吾人の靈魂は不滅にしてさらに死後の生活ありとの思想を予想せざるを得ざるは分明である。はたして此の如き思想が現代および将来をして首肯せしむるだけの威力をば有するであろうか」と言うわけです。死んでから浄土に生まれるとか、浄土でお会いしましょうという思想は、現代とか将来に受け容れるだけの威力を持つかという問いかけをしました。

これは非常に大きな問いかけであります。この野々村直太郎の『浄土教批判』を受けて例えば大江先生は、次のようにおっしゃっています。「浄土教批判は、(中略)近代に生き、近代思潮の中に身を置く一近代人の野々村から出てきたものである。言い換えれば、『浄土教批判』は、野々村が近代という時代の中で、浄土教に抱いた危機意識の表面(ママ)であるといえる。客観の弥陀を信じ得ない時代、いいかえれば、客観の弥陀の存在を認めないことが真実である時代において、野々村の主張は、時代の声を代弁している」と言っています。私も若いときに野々村の論文を読んで、面白いと思いました。まさに「時代の声を代弁している」と感じたことです。

あるいは二葉憲香先生が『浄土教批判』復刻のときに、あとがきかまえがきでしたかに、次のようにおっしゃっています。「野々村直太郎の『浄土教批判』は、浄土教、特に真宗に対する近代の問いに対する大胆で画期的な提言であった。師の提言は、浄土往生思想をとりのぞいても親鸞の宗教的本質、現実的意義は失われたいとするものであった。この提言は、教団内の伝統的立場に衝撃を与え、強い拒否反応を呼び起こした。(中略)師の提起した問題は、真宗の根幹にかかわる近代の問いであるから追放不可能である。この問いに答え、真宗信仰の本質と歴史的现实とのかわりを明らかにするような教学は未確立であり、低迷の域を出ないようにみえる」と。野々村の提言は、現代人共有の不審なので、これは私たちに根本的な問題だと二葉憲香先生はおっしゃっているのです。「真

宗の根幹にかかわる近代の問いであるから追放不可能である」とまで言われました。私も最初は、このような危機感を共有し、野々村を興味深くも、困ったことを主張される人だなあと感じていました。まあ、学ばば学ばほど面白い方ですので、魅力もあるのですが、今日は本題ではないので、ここまでとします。

近代真宗教学と臨床仏教

けれども、先程のお母さんのことからすると、野々村の近代的浄土教批判も何かずれているのですね。当初は野々村の発言は、的を得ている、痛いところを突いていると思っていたのですが、最近私もちよつと違う考えになっています。丹野さんは、死んでも終わりじゃない、子どもは生きていますとおっしゃるわけです。どこで生きているのかは分からないし、お母さんの主張の背景を正確に理解しているわけではありません。しかしとにかく、彼女は死んだら人間の生命は終わりで、その先は何もないのだという立場には立っておられないわけでしょう。現代に、たいへん理知的なお母さんが「死んだら終わりですか」と、尋ねてこられるわけです。

客観的な真理を求めて仏教を探すならば、理としての仏教を学ぼうとするならば、人間の素朴な感情を打ち破る形での仏教との出会いもあるでしょう。無常の道理を説いて聞かせればいいかもしれませんが、しかし、お母さんの場合はそうではないわけです。「あの子は生きている」という形で、亡き子と共に生きておられるんです。おそらくこのような事実が近代においても現代でも、間違いなく存在する世界としてあるのです。私たちはこれから、そのことをきちんと考えていくべきではないか、それが真宗教学においてもそうではないのかと考えるようになったのです。

私たちはどこに立って仏教を学び、真宗を学ばばいいのか。今ではすっかり、学校で数学や理科を学ぶように、

真宗を学んでいるのではないのでしょうか。どこに立って私たちは生死に関わる人間の問いを受け止め、何を考察するのか、そのなかで何が真宗本来の学び方なのだろうかということです。

ここを詰めて考えれば、何かもう少し、野々村の問いに対してわたし自身が解けなかった問題、二葉先生や大江先生のおっしゃるところを突破できるヒントがあるような気がしているわけです。「追放不可能」と指摘を受け、またそのような「教学が未確立である」と指摘を受けている野々村の浄土教批判も突破して、本来あるべき真宗学を確立することが可能なのではないかと思うわけです。それが臨仏教という視点です。

このあたりのことは未整理なのですが、今後考えを深めていきたいと思っています。ともかく最後に、お母さんはこういうことを言っておられました。「なぜかその日だけ、ちゃんと守られるんです。これはきつと、こういう風に、ちゃんと守られるように、子ども達が操作してくれているんだと、そう思うと、なんとなく『死んでも終わりにじゃないよ』ということをして、ちゃんと伝えたいと思うようになったんです」と。「死んでも終わりにじゃないよということをして、ちゃんと伝えたい」と言われます。この「伝えたい」とは、誰になのでしょうか。また、このことを受け止めてあげられる人とは、誰なのでしょう。行政は無理でしょう。経済活動を含め、生活上の復興は大切ですからね。周りのお友達はどうでしょうか。一般の方々はどうでしょう。「死んでも終わりにじゃないよ」となったときに、「そうそう、その通り」となるのでしょうか。そこで私たちはどうでしょうか。私たち仏教や真宗にご縁をいただく現代人はどうでしょう。お母さんの問いを、どのように受け止めるでしょうか。答えはお互いに不問にしますが、少なくとも受け止めるべき人は、私たちなのではないでしょうか。

少なくとも遺族会の方々は、このことを共有されています。最後にお母さんは、このようにおっしゃってくださいました。「今、一緒にここで活動している何人かの仲間たちにも、見えないけれども、いろんなところでそれを

感じるんです。守られていると。私たちは本当は、子どもたちを守ってやらなければならなかったんです。でも、守ってやれずに亡くしてしまった子どもたちに、今は守ってもらえてるんです。子どもたちがちゃんと、うまく人と人の絆をキュキュッと結んで、それで生かされている。私だけではなく、ほかの遺族の方も、そう思っているのです。だからこそ、震災は過去じゃなくて、今でも私たちは、震災と共に生きているんです。決して過去の話じゃないんです」と、お母さんはおっしゃっています。子どもたちに守られ、生かされていると。

終わりに

もう時間ですので終わりにしますけれども、はつきりしない部分が多くありますが、少なくともブツダのさまざまな言葉も、このお母さんのような苦しみに対して発せられているものですね。お釈迦様は対機説法ですので、さまざまな言葉、さまざまな悩みを受け止めながら語っておられます。親鸞聖人ももちろんそうです。特に『歎異抄』や『唯信鈔文意』や『一念多念文意』は、ご門徒の方々が何か問いつけてきたことに対して答えたものです。問いを受け止める中で、「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」と語ったり、「父母の孝養のためとて、一返にても念仏もうしたること、いまだそうらわず」と答えたこともあるでしょうし、あるいは「慈悲に聖道・浄土のかわりめ」と言われるのです。『歎異抄』は特に問いが分からないので答えしか分からないのですが、答えしか分からないと私たちは答えだけを握ってしまうことになりませんか。あるいは、お釈迦様の教えもそうですね。説かれた教えだけを金科玉条のように保持し、それを理として捉え、そこに実際の苦悩が抜け落ちていくことになるのです。勉強すればするほど、そうなってしまうのではないのでしょうか。一番大切なのは、一体どのような苦悩の問い掛けの中で、その教えが立ち上がってきたのかということです。時代の中で、人々の問い掛けを通して、さまざま

まな教えが残っているのですね。ですから、臨床の現場の中でその言葉を捉えなおす努力を私たちはしなければならぬのでしよう。

それによどのような方法があるのか、実は臨床仏教ゼミを始めてたった二年しかたっていない。まだ分からないことが多くありますが、何とか真宗の学びを臨床仏教としてこれから位置づけたいと考えています。

西田は、こう言います。「親の愛はまことに愚痴である。冷静に外より見たならば、たわいない愚痴と思われるであろう、しかし余は今度この人間の愚痴というものの中に、人情の味のあることを悟った。(中略) 人間の仕事は人情ということを離れて外に目的があるのではない。学問も事業も究竟の目的は人情のためにするのである。しかして人情といえ、たとい小なりとはいえ、親が子を思うより痛切なるものはなからう。徒らに高く構えて人情自然の美を忘るる者は、かえってその性情の卑しきを示すに過ぎない」。人情を忘れ高く構える卑しい研究者にだけはならないように、お互いに学ぶべき学びを深めていかなければなりません。

用意してきた最後のものですが、臨床仏教という言葉を使うようになったのは鷺田清一先生の臨床哲学の影響です。鷺田さんは臨床哲学というものの手法とか生成について、このようにおっしゃっています。『経験が私を定義する』のであれば、経験とともに定義は生まれ、深められてゆくものであろう。臨床哲学は哲学臨床とともにかたちをとってゆくはずである。臨床ということ、私は哲学にとっての〈場所〉を考えている。哲学が生成する場所、哲学がはたらきだす場所、である」と。テキストがあつて、哲学があつて、そして現場があるのでなく、現場の中で哲学が生まれ、現場の中で哲学が働きますということ。ですからこれと同じで、臨床仏教という視点で、私も真宗学にとつての学ぶ場所を考えています。真宗学が生成する場所、真宗学が働きます場所。これはもしかすると「学」を取つてもいいのかもしれませんが、そのようなものを考えながら、どのような臨床仏教、

どのような真宗がこれから生まれて深められていくのか、私自身も分かりませんが、何とか考えていきたいと思っております。

今日はすばらしいご縁をいただきまして、心から感謝いたしております。以上でお話を終わります。どうもありがとうございます。

死んだら終わりですか？